

近代化を支えた見知らぬ故郷 MESSAGE

諸岡なほ子

MOROOKA Nahoko



プロフィール

生年月日：1975年4月19日

身長：168cm

出身地：福岡県 血液型：A型

学歴：中央大学総合政策学部卒

趣味：読書、散歩、蹴球

TV：『世界ふしぎ発見!』（TBS） ミステリーハンターで活躍

著書：『地球のどこかの秘境から!? 不思議を求めて世界を旅する、泣き笑い4万キロ』実業之日本社刊

私の故郷大牟田は、アニメに出てくる朽ちかけた巨大なロボットのようなと思う。生い茂る夏草や冷たい霜に身体を覆われながら、その中には小さな電流が燦っている錆びた鉄のかたまり。

そんなイメージで捉えるようになったのは、恐らく大学を卒業して間もないある夏から。大牟田を歩き回っていた時、空き地に放置されたままのトロッコを見つけてからだと思う。10年も遡ればそのトロッコは、石炭を掘り出しにいく男たちを大牟田の地底や海の底まで運んでいたのだろう。そこまでの想像をしていなかった当時の私にも、色褪せた車体に貼付けられたプレートの数字が、妙に生暖かいもののように感じられたのを覚えている。

「三池炭鉱」という名詞は、閉山してから15年が経とうとしている今でも、私が大牟田について紹介する際に真っ先に使う単語だ。石炭を燃して作り出されるエネルギーは、噛み合ったいくつもの歯車や、チェーン、鉄管などを伝い、大牟田全体を時計仕掛けに動かしてきた。もちろんそれだけではなく、石炭産業は長い間、日本の近代化をも支えてきた。

こんな風に、今なら微かな誇りを持って言うことのできることも、大牟田に住んでいた子供の私はまるで興味がなく、テレビに映し出される東京と自分の町との違いによく落胆していた。それもそのはず、私が住んでいた頃は既に石炭産業は斜陽の時代を迎えており、町には疲労感が漂い始めていたからだ。

しかし、本当に大牟田の景色に寂しさを感じるようになったのは、私が東京で暮らす様になって6年がたった1997年、三池炭鉱の閉山からだ。しばらくすると大きな2つのデパートが閉店し、町にはシャッターを閉めたままの商店が増え、高齢化の進行も日本屈指と言われるほどだった。

その頃、20代前半の私はあんなに憧れていた東京に、今度は嫌悪感を抱き始めていた。勝手な話である。ちょうど、個人的にも悩みの多い時期だったというもあるが、農業のように直接的に人の役に立つものを作るのでない都会的な仕事に不信感を、そしてその中で暮らしている自分自身に罪の意識を感じるようになっていたのだ。その頃から、私は自分の故郷に目を向け始めた。一体、大牟田はどんな風に石炭を糧にして大きくなったのか、と。

知っていくと、驚くことに「負の遺産」という言葉も散見された。囚人労働や強制連行、炭塵爆発やその後遺症など、確かに容易く扱うことのできない要素も多くあったのだ。しかし、大牟田についてひとつ知るたびに、ほんやりした生活の背景でしかなかった町の景色に、はっきりとした輪

郭や色が浮かび上がってくるようになった。人を運ばない鉄道も、連なる工場群も、雑草に飲み込まれそうなレンガの建物も、だだっ広い港のそばの眺めも…九州のジリジリと暑い太陽の下、その疲れ果てたような景色に美しさすら感じて、私は大牟田に想いを寄せる様になった。

特に、宮原坑の堅坑槽と巻上機室を間近に見た時、錆び付いた機械や構造物は油をさせば今にも息を吹き返しそうなほど、生命力をたたえているように感じられた。まさに、いつでも動きだせるように待機している朽ちかけた巨大なロボットのように。

きっと、九州各地に広がる近代化遺産群には、どれもまだ活躍できる力を持ちながらも、エネルギー革命などの時代の移り変わりによって役割を終えさせられたものが多いのだと思う。

とにかく、日本や世界を動かしてきた莫大なエネルギーが、九州の大地の下にはある。約4,000万年前の樹木をじっくりと炭化させた地熱だ。そして、大牟田にはその地層へ繋がる大きな穴がうがたれている。そのエネルギーの一端を感じるには、三池炭鉱は絶好の場所かもしれない。そこには、腕の取れかかった巨大なロボットが、頭に鳥の巣の冠を戴き、かつてとは違う優しい表情で人の訪れを待っているのではなからうか。大牟田について考える時、私はそんなことを思ったりする。

三池炭鉱宮原坑跡
【提供：大牟田市教育委員会】